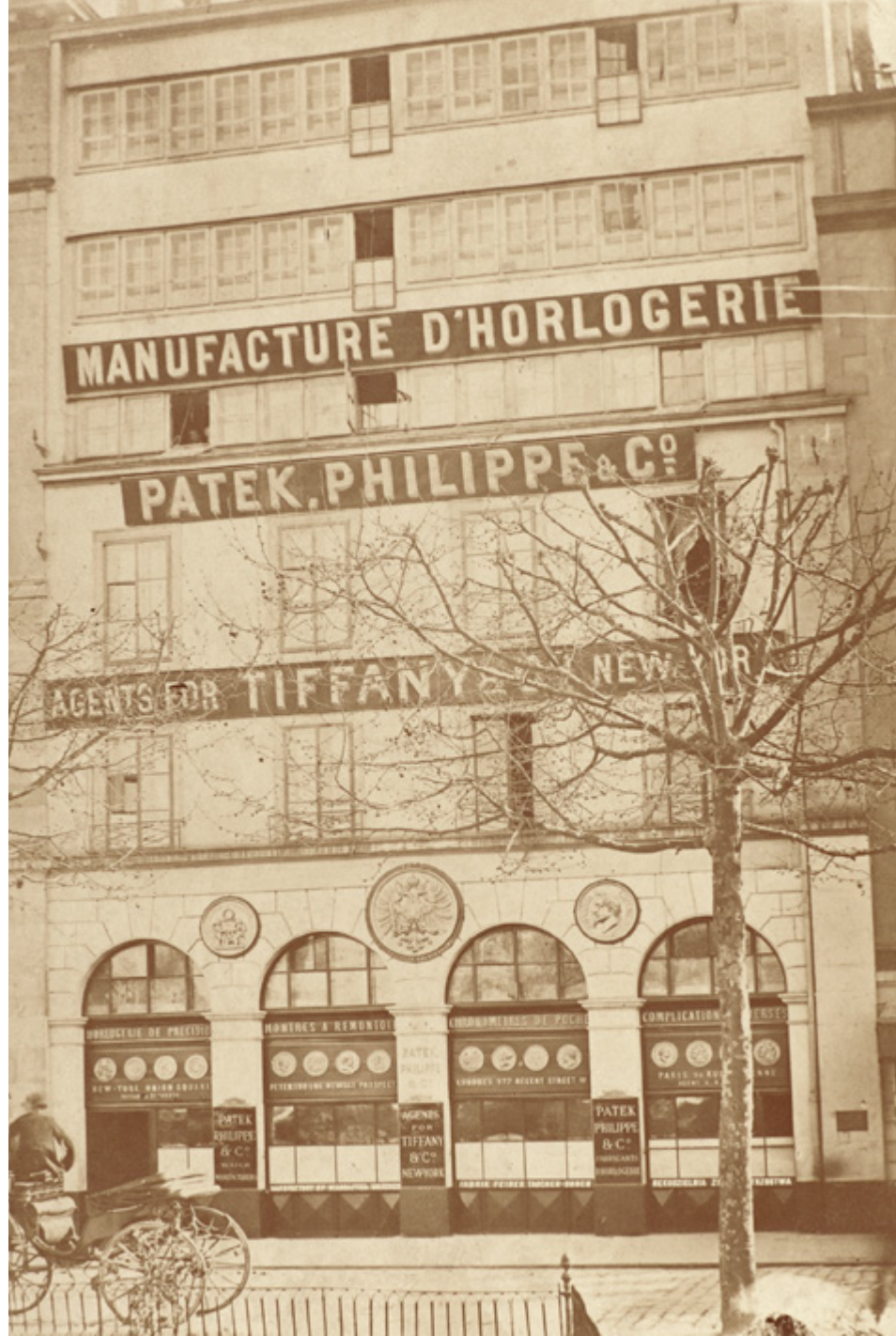


PATTEK PHILIPPE — IN — AMERICA

アメリカにおけるパテック フライツァ

今日、パテック フライツァにとってのアメリカの重要性は自明のことと思われるかもしれない。しかしこの機会に満ちた国との実り多い絆は、過去2世紀にわたり大切に育て上げられたものであった。創業者アントワーヌ・ルルベール・ド・パテックのアメリカ大陸における冒険から、今年のニューヨークにおけるウォッチアート・グラント・エグジビションに至るその歴史をたどる。 ✕ ニコラス・フオーグス 翻訳 小金井良夫



American Register.		
Name	Where from	Visit
Mr. H. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. R. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. J. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. W. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. C. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. D. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. E. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. F. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. G. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. H. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. I. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. J. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. K. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. L. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. M. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. N. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. O. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. P. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. Q. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. R. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. S. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. T. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. U. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. V. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. W. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. X. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. Y. B. ...	New York	Hotel ...
Mr. Z. B. ...	New York	Hotel ...

【前見開き】パテック フィリップのオフィスがあったロックフェラーセンターの屋上に乗るアンリ・スターンと同僚たち (1945年頃)。
 【当ページ】(左上から時計回りに) 1876年以来、ジュネーブのパテック フィリップ本社は、ニューヨークのティファニー社との関係を謳っていた。パテック フィリップの米国との関係は、ジョージ・ワシントンの肖像で装飾された懐中時計



「この無秩序な国は危険に溢れている」とアントワヌ・ノルベール・ド・パテックが書簡に記した通り、パテック フィリップの長い歴史の中で最も重要となる取引関係の始まりは、決して前途洋々たるものではなかった。1854年のクリスマスの数日前、42歳のパテックは、「幸運にも生きて」ニューヨークに到着した。

3年前、1851年のロンドン大展覧会において、パテックはジョージ・ワシントン の肖像で装飾されたきわめて高価な懐中時計を出品した。同年、彼はティファニー、ヤング&エリスというニューヨークの宝飾店で時計を販売することに合意した。そこで1854年、パテックは、スイスの高級時計を愛好し始めたこの遠隔の地を訪問することに決めたのである。彼は、マンハッタン島に足を踏み入れるずっと前から、この計画を悔やみ始めていた。しかし後悔は、生き延びてこそできるものである。

北大西洋を渡る航海は、ひどい嵐のため、10日の予定が2週間かかった。しかしこれは悲劇の序幕に過ぎなかった。彼が到着した都市に比べれば、災害と罪悪の町、ソドムとゴモラはスイスの静かな山村のように見えたであろう。そこは腐敗した政治家や、危険なごろつき共の巣窟であった。火災や暴動がいつ起こってもおかしくない一触即発の無法都市であった。中年のパテックは、2002年の映画「ギャング・オブ・ニューヨーク」でマーティン・スコセッチが描いたままの都市に上陸したのである。彼が一目でニューヨークを嫌悪したのはいうまでもない。

パテックは正午にセントニコラス・ホテルにチェックインし、午後5時に夕食に赴いた。

「その間に私のものを含む4つの寝室のドアが破られたのだ。私たちのトランクの錠前は壊されていた。私たちのバッグは切り開かれていた。すべての金製のもの盗まれていた」。3日後、ホテルのガスタックが爆発した。ジュネーブの同僚に宛てたパテックの書簡は、まるで犯罪調書のようである。「ニューヨークの一流銀行から2万5000ドルの金塊が盗まれ、ティファニーからは1万ドル相当のダイヤモンドが盗まれた」。

投宿していたホテル近くの5軒の家がクリスマスイブに全焼した時、パテックは忍耐の限界に達した。新年早々、彼はニューヨークを後にした。その後の旅行はホームズの叙事詩に比肩できるほどであった。乗っていた列車は脱線し、河川蒸気船の船長たちは、乗客におかましくなく速度競争にふけり、船を沈没させた。シカゴへ向かう途中、深さ4.5メートルの大雪に4日間足止めされた。ビジネスも芳しくはなかった。「今回勃発した財政危機は恐ろしい」とパテックは記している。

しかし静穏なジュネーブに戻った彼は、熟考の末、アメリカの将来性を確信した。やがてその将来性はヨーロッパにおいて現実のものとなった。1872年、ティファニーがジュネーブ市中心に蒸気機関を導入した最先端の時計工房を開設したのである。

だがティファニーのグローバルバリエーションに向けた高額の投資は、4年を待たずして暗礁に乗り上げた。パテック フィリップは工房を引き取り、機械を処分し、建物を売却した。しかしティファニーの巨大な金庫だけは保有し続けた。それはジュネーブでの時計製作から撤退したニューヨ

クの宝飾店が残っていた貴重な記念品だった。2本の米国旗をつかむアメリカの象徴、白頭鷲を描いた金庫は、今日美しく修復され、パテック フィリップ・ジュネーブ本店の歴史的サロンを飾っている。唯一の変化は、「ニューヨーク、ジュネーブ、パリ、ロンドン」の上に記されていたティファニーの名が「Patek Philippe & Cie」に変わっていることである。

1870年代以後、ジュネーブを訪れるアメリカ人旅行者の数は増え続け、パテック フィリップは、ヨーロッパをツアーで訪れるアメリカ人訪問客の定例スポットのひとつとなった。このため特別な「アメリカン・レジスター」が用意され、エレガントな筆記体で訪問者が記録された。1878年に至るまでに、パテック フィリップは平均して毎月100人のアメリカ人訪問客を迎えていた。

アメリカとの取引がこれほど増加してきたため、共同創業者ジャン・アドリアン・フィリップの息子ジョセフ・エミール・フィリップが父の後を継いだ1882年になると、米国訪問は毎年恒例のイベントとなった。さらに米国における勤務期間には、後にパテック フィリップ社長となる者に欠かせない通過儀式となった。これはスターン家に今日まで続く伝統である。

1895年、パテックは米国に代理店を設立した。当時すでにこの国は金びか時代に入っていた。それはイーディス・ウォートンやヘンリー・ジェームズの小説に描かれた時代であった。少数の大富豪の手に無限の富が集中し、彼らの資産はヨーロッパ王室のそれを凌駕した。これらの大富豪にとって、パテック フィリップ

の時計を所有することは成功の同義語のひとつとなった。それはステータス・シンボルにとどまらない、ヨーロッパの文化的洗練の象徴であった。それは先進技術と共に、数世紀の歴史に根ざした学術的知識をオーナーに要求するオブジェだったのである。

これら実業界の大物たちが好む時計の典型は、美しいスプリット秒針クロノグラフ搭載ミニット・リビーター(ムーブメントNo.9045)である。1890年代初期に製作され、ウイスキー王ジャスパー・ニュートン・ダンエルが所有した時計には、彼が財を成した商品にちなみ「Jack Daniel」と刻まれている。パテック フィリップのタイムピースは今日同様、父から息子へと継承された。コーネリアス・ヴァンダービルト・ジュニアは1893年、21歳の誕生日に、「提督」と称された父親の海運・鉄道王コーネリアス・ヴァンダービルトから、重厚な装飾入りのスプリット秒針クロノグラフ搭載ミニット・リビーターを贈られている。

パテック フィリップ愛好家が多いが、ニューヨークの名門銀行家ヘンリー・グレープス・ジュニアと、発明家にして自動車王のジェームズ・ウォード・パッカードほどかけ離れた性格の持主は少ない。後者の膨大な時計コレクションの一部はスミソニアン博物館に展示されている。この2人が最も複雑なパテック フィリップを発売する競争に執心していたかどうかは議論の余地があるが、コンピュータのない時代に設計された世界で最も複雑なタイムピースを所有していたのは、ヘンリー・グレープス・ジュニアであることに疑問の余地はない。彼は1933年1月、著名な超複雑タイムピ

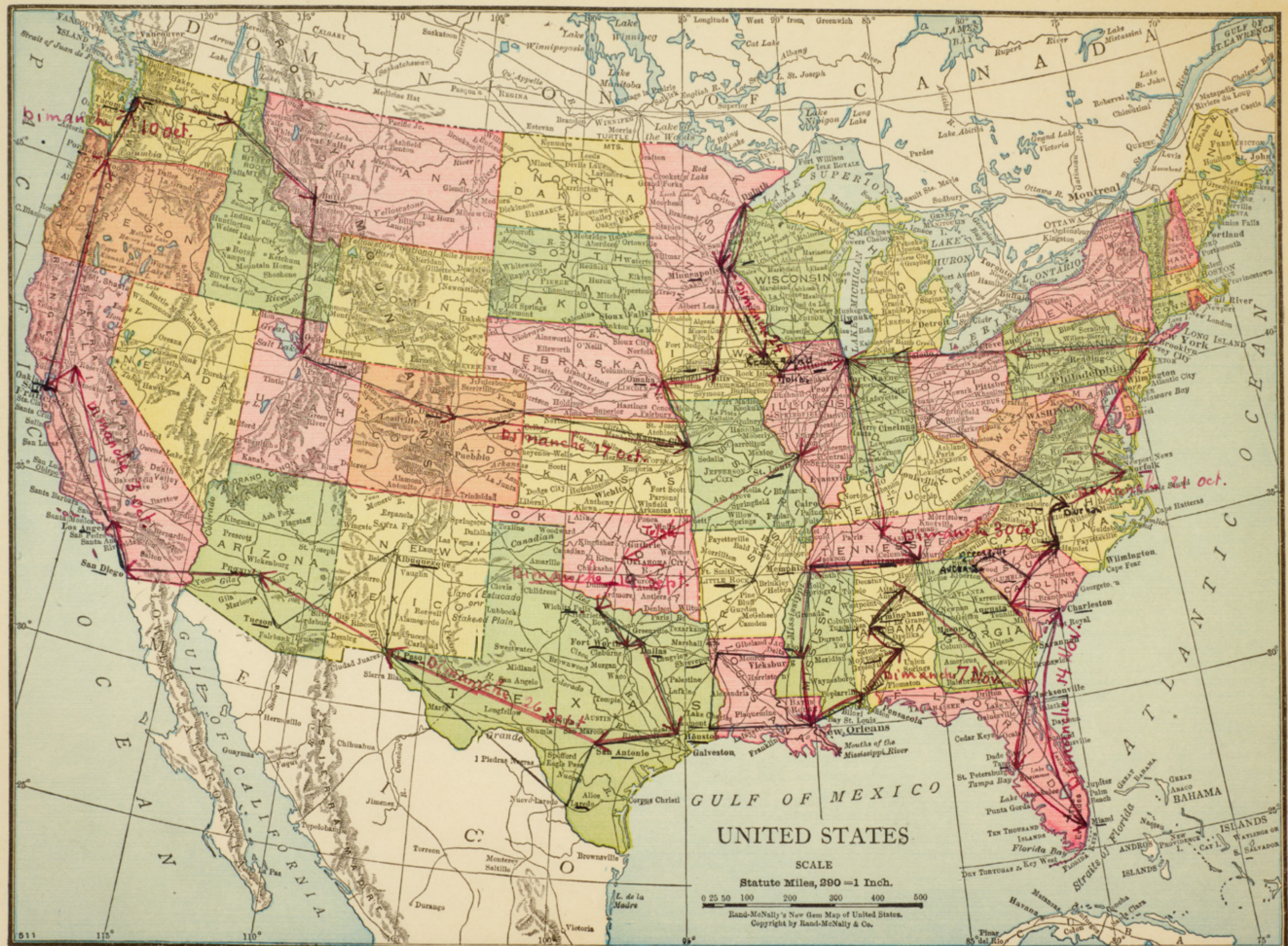


1935年、24歳でパテックフィリップに入社したアンリ・スターンは、大恐慌の後、米国における事業を復興させる任務を与えられていた。アンリは、このアメリカ地図(右)を使って、前任者たちのたどったルートを研究し、より効果的と思われる自身のルートを開拓した。

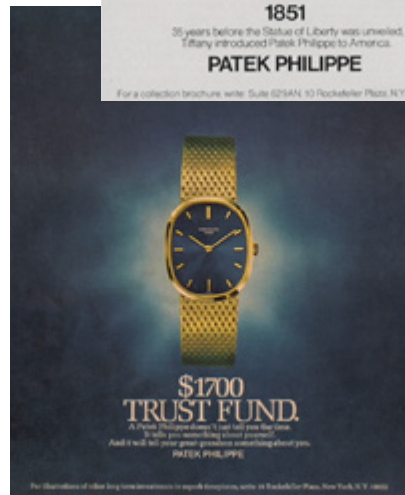
(上) 1957年発表の2597モデル。「クロスカントリー」または「2タイムゾーン」と呼ばれる仕組みは、2つのプッシュボタンにより、時計を前進・後退させることができ、タイムゾーンを越えて旅行する際に有用である。

(中) 1954年発表の2523モデル。2つのリュウズを備えた最初のワールドタイム時計であり、41都市の名が記載された都市表示リングを回し、時刻をローカルタイムに合わせる。このイェローゴールド・モデルは、カラフルなクワゾネ七宝による北アメリカ地図と、昼夜に色分けされた24時間表示リングを備えている。

(下) パテック フィリップ初のレトログランド日付表示付永久カレンダー。1937年発表。96モデル。



— Itinéraire Muller
 — Rectifié



(上) 1950年代、ニューヨークのオフィスにおけるアンリ・スターン(右)。(右上から) 永久カレンダーと2ゴング・ミニット・リピーター搭載の541モデル(1930年製作)。1939年にプラチナ・ケースに再側付された。アンリ・スターンのダイナミズムがアメリカ市場を動員させている時、ジュネーブには著しい技術革新の気風が溢れ、伝説的なイエローゴールドの永久カレンダー1518モデル(1947~48年)などが創作された。

1940年代の広告の例。この1976年の広告は、アメリカとの長年にわたる絆を謳っている。広告デザイナー、セス・トビアスによる1968年の広告には、パテック・フィリップの同義語ともいうべき長寿命と継承のテーマが融合されている。(左)グローブを着用して操作できるように設計されたこの耐磁懐中時計は、1955年、極地探検家リチャード・バード提督のために製作された。

ス、グレイブス・ウォッチの納品を受けるが、時すでに金びか時代は過去のものとなり、アメリカは大恐慌に突入していた。大恐慌が1929年、ニューヨーク株式市場の暴落で始まったのは事実だが、それはやがて全世界に波及した。ジュネーブでは、パテック・フィリップの存亡が危ぶまれていたが、サブライヤーであったスタン兄弟文字盤会社が同社を買収し、危機は回避された。1937年、20代の若者アンリ・スターンがアメリカに派遣された。彼は20年間、同地にとどまり、資本主義の黄金時代の幕開けと、戦後アメリカの世界的大国としての勃興を目の当たりにした。

「1940年代から1950年代、または1960年代初めにかけて、パテック・フィリップで製作された時計の約半分がアメリカ人に販売されたのです」と、1940年代以来ニューヨークでパテック・フィリップの時計技術者として働いていた父を持つ、米国子会社元社長のハンク・エーデルマン氏は言う。当時米国は未来に向けて邁進しており、パテック・フィリップはこれを支援する決意であった。

1955年、米海軍提督リチャード・エヴリン・バードが、南極に研究拠点を設置する米国のデイブフリーズ作戦司令官に任命された。バードは極地探検のベテランであり、過去の探検で、パテック・フィリップの時計(No.201484)を着用した。バードが南極大陸に再び挑戦することを知ったパテック・フィリップは、直ちに彼に「当社の感謝と友情の証しとして、高精度なパテック・フィリップの時計を贈りたい」と提案した。バードはこれに感謝の意を

表し、彼の新しい時計は「どこにでも私と同行する、貴重な伴侶となるでしょう」と書き送った。しかし前回のパテック・フィリップの時計も「長年の使用にもかかわらず、まだ完璧に機能しています」とつけ加えるのを忘れなかった。

長距離旅行は冒険家のみのもものではな。アメリカにおける需要が増加するにつれ、パテック・フィリップの製品には、アメリカの影響がより強く見られるようになった。アメリカとヨーロッパを結ぶジェット旅客機路線のスタートと時を同じくして、2597モデルが発売された。「クロスカントリー」または「2タイムゾーン」としても知られるこのモデルの魅力は、「ブッシュボタン・タイム」という広告コピーに最もよく現れている。2つの小さなブッシュボタンにより、時計を前進・後退させることができる。「この機能は、あるタイムゾーンから別のタイムゾーンに頻繁に移動する人を対象としています」とパテック・フィリップの広報資料は説明している。

1960年代後半の象徴的な腕時計として著名なゴールデン・エリプスのフォルムに、アメリカの高速道路インターチェン

「1940年代から1950年代、または1960年代初めにかけて、パテック・フィリップで製作された時計の約半分がアメリカ人に販売されたのです」とハンク・エーデルマン氏は言う。

ジの空中写真がインスピレーションを与えたことは、社内伝説となっている。ゴールデン・エリプスは、その発表時にはパテック・フィリップのコレクション中、最もアヴァンギャルドなデザインのひとつであったが、パテック・フィリップが自社の輝かしい歴史について語り始めたのも、1960年代に入ってからのものであり、アメリカはこれに耳を傾けた。1969年10月15日のダラス・タイムズ・ヘラルドの記事は、旧世界の驚くべきクラフトマンシップと歴史を読者に紹介している。

「来週アメリカで初めて、ジュネーブのパテック・フィリップ・ミュージアム所蔵の、希少な厳選されたアンティーク時計の展示会が、リンツ・ブラザーズ・ジュエラーズ・ダウタウン店で開催される(…)火曜日と水曜日には、1856年にスペイン女王マリー・クリスティーヌのために製作されたハート型時計が展示され(…)また1928年にローマ法王ピオ十世のために製作され、法王の紋章を七宝で装飾したミニット・リピーター懐中時計も展示される(…)歴史的タイムピースに施されたクロワゾネや七宝は、一般に旧世界の失われた芸術と見なされている

が、今回は、海洋、馬術、狩猟などの場面を華麗に描写した、手づくりの七宝で装飾された現代的な紳士用懐中時計のコレクションを見る希少な機会となることだろう。パテック・フィリップの1970年コレクションとして注目されるのは、18金ブルーゴールドの文字盤を備え、ダイヤモンド、ルビー、サファイヤ、エメラルドをセッティングしたブレスレット付婦人用腕時計。バンドまたはブレスレット装着の紳士用モデル。センターセコンド付自動巻モデル。さらにムーブメント表示を備えた永久カレンダー腕時計も見逃せない」。

ダラス市民がパテック・フィリップの希少なタイムピースを見学してからおよそ50年が経つが、今年の夏、アメリカでは世界的に有名なパテック・フィリップ・ミュージアムのハイライトを含む、注目すべき腕時計のコレクションを再び賞賛することができる。このウォッチアート・グラッド・エグジビションはニューヨークで一般公開される。

米国でこれほど野心的な催しはパテック・フィリップによって試みられたことは、これまでなかった。見学者はニューヨーク市民にとどまらない。マンハッタンを越え、アメリカ国境を越えて多数来訪することが予想される。1世紀半以上にわたってアメリカを魅了してきた文化や工芸技術を、身をもって体験できるまたとない機会である。160年以上昔、アントワーヌ・ルベール・ド・パテックがニューヨークに対して持った印象は芳しいものではなかったが、今回地元以外の見学者たちが、この都市に対してよりよい印象を持つことを願ってやまない。